

感染と人間（12）

中田 光

平成の千早城

平成8年の夏に起こった病原性大腸菌O157による食中毒は、死者12名、患者5000名以上を出し、日本中を恐怖に陥れた。しかし皮肉にもこのことがきっかけになって、それまで旧時代の遺物のように思われていた細菌感染症学が息を吹き返し、学会は活況を呈した。国も漸く動いて、国立予防衛生研究所を国立感染症研究所と名称を変えて急ごしらえの感染症研究体制をスタートさせた。医科研の中でその存在すら忘れ去られていたわが微生物株保存施設にもわかに忙しくなってきた。O157ばかりでなく、他の食中毒原因菌であるサルモネラ、黄色ブドウ球菌、カンピロバクターなどの分譲依頼と問い合わせがひっきりなしで、8年の夏までに保存菌株のデータベースを作り終えていた私は、誠に不謹慎な話だが、「神風吹く」と心の中で叫んでしまった。製薬会社からの共同研究の申し入れもあり、アルバイトの人が増えた。また、夏から北里大学呼吸器内科のドクターで恩師の田中寛先生（感染と人間（3）に登場）のご子息である田中直彦先生（写真1）が客員研究員として研究室に加わった。留学時代から温めてきた肺胞蛋白症の病原因子の研究を田中先生と開始することとなった。O157や抗菌菌を培養し、抗菌剤の効果を調べるというアルバイト的な研究を請け負い研究費を得て、標準菌の保存と分譲のシステムを整え、老朽化した設備を少しずつ改善し、余力でもって研究を進めていくという体制ができて、孤独な闘いという閉塞感は次第に薄れた。私は密かに微生物株保存施設を「平成の千早城」と呼んで、機が熟し、ひそ捲土重來の時まで、勝たずとも負けない戦をしようと心に決めた。

それでも、心の中には何かしっくりいかないものが残った。本来、国家が力を入れなければならない病原菌の保存と分譲の事業を何故、私が今アルバイト研究をして支えなければならないのだろうか？こうした不満を込めて、赴任してから1年間の成果を事業報告として所に提出した（すでに甲所長から乙所長へ代替わりしていた）。しかし、施設が所属する感染免疫グループの大先生方からは「中田君は先端研究から立ち後れている」という評価をいただいた。先端研究とは一体なんだろう？医科研で行なわれている研究を見渡すと、確かにテクノロジーは新しいものを用いているが、どれをとっても米国の追従ばかりで、これぞわが国のオリジナルと言



写真：渋谷中央ライオンズクラブの例会にて。著者は中央、右どなりは牟田梯三さん。

中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ペルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手。

えるものがないのである。択一式の受験教育に毒された没個性の人達が欧米の一流誌を読んで血眼になってやった研究という印象を得る。むしろ、独創的な研究は地方の国公立大学で細々と育てている。わが国の科学研究が危ういのは、脆弱な地盤の上に高い塔を築こうとするからで、その基盤の弱さゆえに十分機能できないまま、しばらく経つと流行が変わるので、また別の塔を築こうとする。そんなことの繰り返しである。標準菌の保存と分譲はいつの時代にも重要な感染症研究の基盤なのに・・・。

染谷さんとの出会い

O157の脅威が日本中を吹き荒れていた8月のある日、朝日新聞科学部のM記者から取材の申し入れがあった。前岐阜大学医学部教授の藪内英子先生がO157の件でM記者から取材を受けた際、是非訪問してみなさいと施設を指名してくださったのである。若く精悍な風貌のM記者は、施設長の金ヶ崎先生と私の話に熱心に耳を傾け、物置のような施設と老朽化した機器、特に例の冷えない極低温冷凍庫を見学していった。

数日後、朝刊の3面に極低温冷凍庫の前で凍結菌株のバイアルを持っている私の横顔が掲載された（写真2）。「細菌保存充実ほど遠く—O157禍の一方で」と題した記事は、わが国の細菌研究者の層は薄く、研究を支える基盤整備が後れており、特に必要な標準菌の保存は東大医科研も阪大微研も非常に少ない予算と人員で運営されていると報じたものだった。両施設とも改善要求を出しているが、国は不要不急扱いということも書かれていた。これで、医科研の対応も変わっていくだろうと思っていたら、中からではなく、意外な所から反応があった。

施設の窮状が朝日新聞全国版に報道されて2日後に、渋谷中央ライオンズクラブ会長の染谷賢治氏の訪問を受けた。眼光するどく、全身からエネルギーを発散させているような方で、新聞記事を読んでじっとしていらなくて来られたという（写真3）。私は、施設の活動を説明し、老朽化した設備をご紹介した。染谷さんは、「へえー」と感嘆することしきりで、「日本の病原菌の保存と分譲がこんな貧しい施設で行なわれているのはおどろきだねー」と仰って、ライオンズクラブで何かお手伝いできることを考えましょうと約束し



写真1：田中直彦先生

てくださった。染谷さんは、「お国のため」だとか「義を見てせざるは勇なきなり」という言葉を口癖にしている幕末の志士のような方である。長年、都区議会議員を務めておられたが、現在はライオンズクラブの会長としてボランティア活動をされている。

それから、1、2ヵ月間にわが微生物株保存施設は、染谷さんがお連れした様々な方面の人達の訪問を受けた。私は、施設を案内し、現状をありのままにご説明した。10月になって、文部大臣官房をされているK都議会議員が訪れた。K議員は文部大臣に施設の改善をお願いしてみたらどうかという。「えー、そんな大それたこと出来るんですか？」と言ったものの、もう医科研所内での改善要求は万策尽きているといった感じだったので、大臣がこのことに関心を持ってくれたらどんなによいだろうと思った。

こうして、染谷さんとK議員の勧めにより、文部大臣宛に嘆願書を書き、それに施設改善の道を賭けてみようかという気になった。

けんこんいつてき
乾坤一擲の手紙

その手紙は、以下のような一文だった。

小杉 隆 文部大臣殿

わが微生物株保存施設の現状について

東京大学医科学研究所

微生物株保存施設助手

中田 光

東京大学医科学研究所微生物株保存施設は、昭和47年に設立され、病原細菌の標準株（性質が明らかな細菌）を保存し、全国の大学や国公立の研究所、地方自治体の衛生試験所、病院の検査室、検査学校などからの要請を受けて菌株の分譲を行なっている施設です。わが国では、公的には他に大阪大学微生物病研究所に同様の施設があるのみで、これら2施設に保存されていない病原菌を手に入れたとした場合、欧米の保存機関に問い合わせで発送をお願いし、税関審査のために沢山の書類をそろえ、場合によっては空港まで受け取りに行かなければなりません。（中略）



写真2：朝日新聞記事

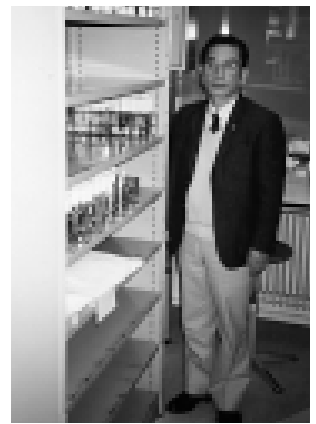


写真3：染谷賢治さん

細菌の研究や教育、検査を行なう場合、陽性コントロールとなる標準株や治療効果を調べるために過去に流行した菌株が不可欠ですが、その保存や分譲の体制を整えようとする動きは皆無といってよいと思います。わが微生物株保存施設にしても定員は助手1名のみで、旧式の設備でなんとか運営している状態です。特に菌の保存に不可欠な極低温のフリーザーは何時故障してもおかしくない旧式のもんです。（中略）

この現状を打開するために施設長の金ヶ崎教授（細菌感染研究部教授と併任）と何度も所に対して施設の改善を要求しました。しかし、所の対応はこれまで極めて冷淡でした。私は悩んだ末に、高校時代の先輩で医療機器メーカーの社長に頼んで医療器の治療研究のための書類書きのアルバイトをさせてもらい、奨学寄付金を国庫に入れてもらいました。そのお金でパートの人を雇い、平成7年度末より、8カ月間かけて保存菌株をコンピューター入力し、既に約2000株の情報を瞬時に引き出せるようにしました。それをもとに、他機関へ分譲可能な約1200株のリストを作成し、刊行しました。

しかしながら、私は今でも何故、公共のためにやっている仕事に対して十分な公的援助が受けられないのか、この重要な事業を支えるために何故私がアルバイトをしなければならないのか甚だ納得がいけないものがあります。現在、医科学研究所が力を入れている遺伝子治療やヒトゲノム解読プロジェクト（ヒトの全遺伝子の構造を明らかにするプロジェクト）は次の時代の医学の発展のために必要なものです。しかし、現在起こっている治療や予防可能な感染症に対応していくのも我々の重要な任務ではないでしょうか？

文部大臣の視察

その手紙は、K議員から大臣秘書に渡り、さらに小杉文部大臣の目に触れることとなった。K議員を通じて《大臣はこの問題に関心を持っており、一度視察したいが、今は忙しい。いずれ折を見て訪問したい》という旨のお返事を頂いたが、間もなく、例の住専の問題で内閣と国会が大荒れに荒れて、音沙汰がなくなった。私は、ここまでやってくださった染谷さんとK議員に感謝しつつ、大臣が私の手紙に目を通してくれたことに満足した。2カ月、3カ

月が過ぎ、年が明けて、私自身すっかりこのことを忘れてしまった。

5月7日。雲一つない五月晴れのその日の朝は、何となく胸騒ぎがして、いつもよりも30分早く出勤すると、留守番電話の伝言を知らせるランプが点灯していた。録音再生のボタンを押してわが耳を疑った。染谷さんからの電話で、今日の午後、大臣が視察に来られるという。「大変だ！文部大臣が視察に来られます」と教授室に駆け込むと、金ヶ崎施設長も驚き興奮した様子だった。まず、乙所長にこのことをお知らせしなければならないと仰って電話をされた。しかし、受話器を置かれた施設長はひどくご立腹の様子だった。文部大臣が本日視察に来ますと言うと、所長は「そんなはずはない。ゲノムセンターの視察に来ることになっている。私は忙しいんだ」と言って電話を切られたという。そういえば、2、3日前からゲノムセンターへの道が綺麗に掃除されていたなと思った。

頭の中がパニックになった。私の普段着といえば、ワイシャツに薄手のチョッキ姿である。家に電話して、一張羅の背広を家内に持ってきてもらうことにした。それから、大臣が施設を見学されるとすれば、お茶ぐらい差し上げなければ失礼だ。しかし、施設には100円ショップで買った、しかも端が欠けた茶碗しかない。私は、ポケットマネーをはたいて茶碗と茶托のセットと高級和菓子を買って行った。それから、全員で廊下と部屋中の掃除が始まった。いくら老朽化した施設とは言っても清潔にしておかなければ、正論も通らぬであろう。大臣にどのように窮状を訴えたらよいのか、そのことを考えただけでも胸の鼓動が高鳴った。午後1時半頃、ライオンズクラブの染谷さん、早乙女さん、鈴木さんが応援に駆けつけた。染谷さんは長年の都区議会の経験から、「こういうことの成否は、一瞬の駆け引きで決まる」と仰り、玄関前の車寄せでタバコを吹かしながら大臣一行を待っていた。午後2時半頃から、構内のあちらこちらに何処からともなくSPが集まり、危険物がないかどうかチェックし、盛んに無線で連絡を取っていた。染谷さんはそのSPの一人一人に名刺を配り、「本日の大臣の視察の目標は微生物株保存施設です」と説明して回った。SPの中にはすでに視察の目的をご存知の方もおられたという。午後3時半、大臣一行が到着した。大臣は下車するなり、染谷さんを見つけて、「おい染谷、こんな所で何しているんだ？」と声をかけられたという。大臣は都区議会議員時代の

染谷さんの知人だったのだ。大臣は所長の案内で東大総長らとともに会議室に入り、医科研の沿革について説明を受けた後、視察のため、多くのSPや随行員とともに冷蔵庫やロッカーが並んだ廊下を歩き始めた。染谷さんはその先頭を歩き、SPにこちらですと施設の方へと誘導した。医科研側の予定には微生物株保存施設の視察はなかったで、一行の後方を歩いていた所長や教授連はさぞ驚いただろうが、狭い廊下なので行く手を遮ることが出来なかったのだろう。大臣一行は染谷さんが案内する方にどんどん進んでいった。

小杉文部大臣は「この研究室はO157をやっているそうだが・・・」と仰りながら、沢山のSPや随行員とともに部屋に入ってきた。たちまち、狭い実験室は20名以上の人で立錐の余地もなくなり、大臣にお茶と和菓子を差し上げるという当初の計画が、全くナンセンスであったことに気づいた。染谷さんは「ここは、標準菌を全国に分譲している重要な施設です！」と大声で仰った。タイミング良く、技能補佐員の安達さんが、P2(病原微生物を扱う部屋)で分譲依頼のあったO157を植え継いでいたので、私は大臣をご案内し、「このように全国から分譲依頼のある菌を培養しております」と説明した。教授の一人は、「なんで菌株なんかを見せなければならぬんだ！」と言い、みな怪訝そうな顔で遠巻きに一部始終を見ていた。そこに、知らせをうけた施設長の金ヶ崎先生が人混みをかき分けるようにして駆けつけ、菌の保存室に大臣をご案内した。金ヶ崎先生は例の冷えない極低温冷凍庫を指さして、「この冷凍庫は大事な菌が保存されているのですが、十分に冷えません」「この人は、中田君といってアメリカでエイズを研究していましたが、今は菌の保存と分譲をしてもらっています。少ない予算で頑張っています。後継者がいなくて、彼に辞められたら困るのです」と畳み掛けた。大臣は保存室の古びた冷蔵庫、凍結乾燥器、リノリウムの所々剥げた床、ペンキが落ち錆びついた扉を一通り見渡し、「ここは、ひでえなあ！」と感想を仰り、SPとともにゲノムセンターへと向かわれた。この間、2分ぐらいだったろうか？私には、この時間が無限に長く感じられた。そして、大臣一行が立ち去った後も、暫く立ち尽くし茫然としていた。冷静だったのは、染谷氏だ。彼は、ゲノムセンターへ向かわれた大臣を追いかけ、「大臣！」と呼び止めた。小杉文部大臣は「わかってる。予算だろ」と仰った



写真4-1：改修前

という。

「聞いてないぞ！」

ところで、視察の折、大臣一行の後方で烈火のごとく怒り、「聞いてないぞー！」と怒鳴っている人がいた。乙所長だった。驚いたことに、所長は大臣の視察の後、大臣秘書に抗議の電話をしたのである。夜になって、それでも治まらない所長は、金ヶ崎施設長を所長室に呼んで始末書を書くように迫り、委員長会で問題にすると仰った。当然のことながら、施設長は強く反発した。5月7日の朝になるまで、文部大臣が本当に視察に来られるなんて誰も（私自身も）信じなかったわけであるし、知らせをうけて真っ先に施設長は所長に連絡したのだった。ただ、所長は不幸なことに大臣が施設の視察に来るという金ヶ崎施設長の言葉を信じなかったのだ。

その頃、私は一人施設に居て、ひたひたと湧きあがる感動を噛みしめていた。赴任してからのつらかった思い出が走馬燈のように駆けめぐった。研究費がなくて掃除ばかりしていた日々。ドライアイスでかしこ悴む手を電気ストーブで暖めながら凍結菌のバイアル1本1本の情報をコンピューターに入力していったこと。教授連に何度も施設の窮状を訴えても無視され続けたこと。みんなこの施設を見に来ることさえなかった。予算が付くとか付かないとかは二の次だ。何よりも施設の窮状を文部行政の頂点にいる方に見てもらった。もう、教授会も文部省もこのことを知らないとは言えないだろう。私は勝ったのだ！

数日後に開かれた委員長会で大臣視察の件も施設長の責任問題も誰一人として口に出さなかったが、この事件を契機に施設の改善は徐々に進んだ。所の予算で凍結乾燥装置を修繕し、P3実験室（病原性の強い菌を扱う実験室）のエアフィルターを新品と交換し、例の冷えない極低温冷凍庫は故障を契機に最新式のバックアップ装置付きのものに替えることが出来た。その後、私と染谷氏は衆議院文教委員T議員のもとへ施設改善の陳情に行き、平成9年の暮れに晴れて特別事業費の配分が認められた。それで、念願の施設の改修を行ない、現在に至っている（写真4）。

苦難さえ誇りに思う

医学に憧れ、大学を再受験して、医者になって、沢山の患者と



写真4-2：改修後

出会い、やっと臨床に慣れたと思ったら、今度は研究の面白さへのめり込んで、研究を続けたいばかりに苦勞の多い環境にいて、気がついてみたら、40歳を過ぎていた。人が見たら、なんて無駄の多い、取り越し苦勞の人生だろうと思うかもしれない。しかし、よくよく自分が辿ってきた道を振り返ると、もし、過去に戻ったとしてもやはり自分は同じ選択をしただろうと思うことがある。何故かと言うと、人生の節目節目において、私は組織よりも人間を、拘束よりも自由を選んできたからである。だから、自然に自分を拘束しようとする組織や上司から離れていき、自由だが苦勞の多い、よるべない世界に入っていってしまう。

自由であるがゆえにまた、絶えず葛藤がある。何故なら、私は自由でありたいが、同時に孤独になりたくないからだ。それゆえ、人の苦勞を背負ってしまうこともある。そう思って自分の周囲を見渡すと、気が合う友人も先輩もまた恩師も、みんな「自由でありたいが、孤独になりたくない」志向の強い人達であることに気がついて、おかしくなった。

つまり、私の人生も周囲の環境も友人も、単なる偶然の結果ではなく、私という人間性の根源と密接に繋がった必然なのかもしれない。40を過ぎたあたりから、そのことに気がついて、必然の結果として湧いてくる苦勞を享受しようと思えるようになった。そんなある日、聖書に次のような言葉があるのを偶然見つけて、感動した（私はクリスチャンではない）。この数年間、私は何度もこの言葉を心の中でつぶやいて、自分を励まし、勇気づけてきたのである。

『苦難さえ誇りに思います。

苦難は忍耐を生み、

忍耐は練達を生み、

練達は希望を生むからです。

そして、この希望は人を裏切りません。

この希望は神の大いなる祝福だからです』

（参照 ロマ5,3-5）

完